

郵便振替=00100-3-749814 名義「上島敏昭」

大道芸アジア月報 2020 年 2 月

vol. 31、no. 2

編集・発行人 上島敏昭

〒165-0025 東京都中野区沼袋 2-31-2

春山荘・東

■大道芸案内

主な大道芸スポット（土・日・祝日など、通年大道芸が見られるポイント）

■大阪・天保山海遊館広場 ■大阪パフォーマーライセンス <http://www.osaka-performer.com/index.php>■お台場・デックス東京ビーチ ■クインズスクエア横浜 at! www.studioeggs.com ■名古屋・大須ふれあい広場■ヨコハマ大道芸（山下公園、グランモール公園、ジャックモール） <http://daidogei.jp/>■しずおか大道芸の街 <http://shimarukai.org/> ■東京都へブンアーティスト www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/bunka/■江ノ島大道芸 <http://www.fujisawa-kanko.jp/alacarte.html>■仙台まちくるパフォーマーズ <https://machi-kuru.com/performers>**★大道芸ニュース**

モナコ公国で1月16日～26日に開催された、第44回モンテカルロ国際サーカスフェスティバルで、ハッピードリームサーカスに在籍していた、マルチネス・ブラザース（アラン・嵐兄弟）が、足芸「イカリオス」で金賞を受賞した。

★浅草雑芸団の旅

向島百花園梅まつり ●2月9日（日）／2月23日（日）

★今月の大道芸公演

△サーカス学セミナー「澤田隆治サーカスを語る」 ○早稲田大学戸山キャンパス 36号館 682教室

●2月1（土）14：00

出演：澤田隆治（聞き手：大島幹雄・サーカス学会会長）

「てなもんや三度笠」「スチャラカ社員」などのテレビ番組を演出し、「視聴率100パーセント男」の異名をもち、花王名人劇場やズームイン朝などの人気番組をつくりだした大プロデューサー・澤田隆治がサーカスについて初めて語ります。聞き手は、サーカス学会会長で雑誌『論座』で連載された「澤田隆治プロデューサー一代記」の聞き手をつとめた大島幹雄がつとめます。

どなたでも入場できます

△サラリーマン現代サーカス「CLONES」（大阪府ナイトカルチャー発掘・創出補助事業） <https://clones.jp/>

○COOL JAPAN PARK OSAKA（TTホール）（大阪府中央区大阪城3-6）

●2月7（金）～11（火祝）各20：00開演 / 土・日・祝日は13：00開演もあり

原作・KAMIYAMA、音楽・ANALOGIX、出演：KAMIYAMA、望月ゆうさく、品川ミズキ、Gregory McElroy、Ariel Anne Mosier、Hugo Neol、Jean-Denis Roy

¥6800（全席指定）

予約・問合せ：チケットよしもと予約問合せダイヤル 0570-550-100

△山本光洋ソロライブ丘を越えて vol.3 <https://www.koyoworld.com/> ○中野・plan-B

●2月13（木）19：30 / 14（金）19：30 / 15（土）14：00&18：00

一般（予約・当日）¥3000、大学生・専門学校生¥2000、高校生以下¥1000

予約・問合せ：山本光洋 office：03-3951-1999

△第31回民俗芸能と農村生活を考える会 <https://www.znk.or.jp/event/>

○日本教育会館3階「一ツ橋ホール」（東京都千代田区一ツ橋2-6-2）

●2月15（土）13：00開演

出演：奈川獅子（長野県松本市）

入場無料※要申込み。下記のいずれかの方法で申込んでください。

①ホームページから ②往復ハガキで ③FAXで

申込み&問合せ：〒101-0021 東京都千代田区外神田1-16-8N ツアービル4F

（一社）全国農協観光協会 「民俗芸能と農村生活を考える会」係

電話：03-5297-0321 / FAX：03-5297-0260

△プレジャーB Clown All Stars～道化師の祭典 <http://hospital-clown.jp/news/1429/> ○名古屋市東文化小劇場

●2月15（土）15：00 / 16（日）11：00

出演：クラウンファミリープレジャーB

前売¥2500、当日¥3000

△東京のチンドン灯よ いつまでも（かわち家20周年チンドン演奏会）

○江東区文化センター・レクホール

●2月17（月）19：00

出演：チンドンかわち家（長崎県より）、堀田博喜（月島宣伝社・東京）

¥2500

予約・問合せ：かわち家 090-882-6300 e-mail info-mail@kawatiya.jp

△亀戸大道芸ほこ天レトロフューチャー <http://www.kameidodaidogei.com/> ○亀戸十三間通り歩行者天国（亀戸駅北口すぐ）

●2月23（日）12：00～16：00

雪竹太郎、Kanauknot、虹たまや、ひいろ、TOMI、油井ジョージワンマンバンド、大道芸人ジーニー、Nanisoie、アンティークドールリリー、木天蓼亭 Kana、PESTRICA、KEIKO、ぐれいすと、音姫金魚、YAMAHA/ソらと晴れ女、長谷川あひる、しろみときみ、舞夢男爵、扇せんす、ハードパンチャーしんのすけ

△第20回地域伝統芸能まつり テーマ「競う」 <http://www.jafra.or.jp> ○渋谷区・NHKホール

●2月23（日）14：30 開演

出演：一人角力（今治市）、秋田竿灯まつり（秋田市）、座喜味棒術（沖縄県読谷村）、江戸火消しの梯子乗り（東京都）、三島囃子（静岡県三島市）、能「舍利」（観世流）、下水流白太鼓踊り（宮崎県西都市）、高田神社横野獅子舞（岡山県津山市）、阿波おどり（徳島市）

入場無料※要申込み。下記のいずれかの方法でお申込みください。締切：1月31日

①インターネットから ②往復はがきで

申込み&問合せ：〒150-0047 東京都渋谷区神山町 5-5 NRビル 5F

「地域伝統芸能まつり」鑑賞応募事務局

電話：03-5777-8600

△蕨 OurDelight パフォーマンスカーニバル vol.22 「蕨学園・ときめいて冬」 <https://www.facebook.com/pg/p.ourdelight/posts/>

○蕨市・ライブハウス OurDilight

●2月23（日）14:00 開演 / 1月24（月）14：00 開演

出演：山本光洋、三雲いおり、ダメじゃん小出、サンキュー手塚、加納真実

料金：予約・当日とも 3500円

<ご予約方法> <https://www.facebook.com/pg/p.ourdelight/posts/> を開き、専用予約フォームで

△パントマイムシルヴブレ 結成20周年アニヴァーサリー公演「廿（にじゅう）・春いちヴァン」

○横浜市中区県民共済みらいホール

●2月29（土）15：00 ふりかえれヴァン編 / 3月1（日）15：00 Best Vingt 編

一般・前売¥2800、当日¥3300、こども（小学生～高校生）¥1800※前売りのみ

<予約方法> <https://kyosei-kyoso.jp/events/svp20th/>

問合せ：チケットかながわ 0570-015-415（10：00～18：00）

△演の祭典2020 <https://ameblo.jp/asakusapp2/> ○あさくさ劇亭 および 隅田公園内・カフェW.E

●3月7（土）11：00～17：00 カフェW.Eにて 「和菓子練り切りワークショップ」 講師・彦一団子 ¥1200

19:00 開演 「おとちゃんNIGHT」：おとちゃん、三雲いおり、ラテアートパフォーマー☆ファイター☆、佐藤達、¥2500+1ドリンクオーダー

●3月8（日）11：00～17：00 カフェW.Eにて 「スプレーアートワークショップ」 講師・☆ファイター☆ ¥3500

19：00 開演 「フレッシュホッピングパーティ」：MIHARU、カイ、たろりん、マイン、リオ ¥2000+1ドリンクオーダー

●3月6（金）・7（土）・8（日）あさくさ劇亭にて

インプロモーターズ、ゴールドタイガース、サクノキ、松鶴家天太、すがぼん流パントマイム Mr ふじやん。ソらとたかくわと晴れ女、てのひら、メランコリー鈴木、山田と進藤

若林正の

食って極楽

老舗のつけ麺

・・・東池袋「大勝軒」

私は大のラーメン好きで、一時は週に7、8食は食べていたが、健康面や加齢等によりこのごろは週1、2食に抑えている。しかし時々「食いたい！すずりたい！」の欲求に襲われてラーメン屋に駆け込むのだ。今回も池袋に観劇に行った際、その発作が起きてしまったのだ。知る人ぞ知るつけ麺の老舗「大勝軒」。初めてここで食べたのは四十年ほど前のこと。

いつも行列ができていたラーメン屋があり、気になって入ったのだ。当時中華そば専門店は珍しく、また、つけ麺は常連客が頼む裏メニューだった。その後、つけ麺が主役になり、私もずいぶんすすった。それから時代はつけ麺ブームになり、様々な味の店がそこかしこに出来た。大勝軒も弟子たちが暖簾分けで各地に店を出し、店主が亡くなると本店を誰が継ぐのか跡目争いが話題になるなど、ちょっとしたドラマもあった。弟子たちの店にはいろいろ行ったが、それぞれ独自のメニューを出したり味を変えたり、本家とは別の道を歩んでいるように思う。

今回一番弟子の総本店で昔の味を確認したかった。店は元の場所から高架下に移転した。店も大きくなったが、有名店だけに、開店直後だがすでに半分以上席は埋まり、まだまだ客は入ってくる。つけ麺中盛り¥900。相変わらず量は多い。すすりこむと、アレ？こういう味だったっけ？美味いけど、なんというかあっさりしてて肩透かし。覚えている味とは違う。う～ん、期待しすぎて脳内で味覚を書き換えたのかしらん。これなら別の店の方が昔の味に近かった…ような気がする。

○思い出は追わない方が良かった度

=2ワカ

見世物としての映画

上島敏昭

◆草創期の映画

二か月ぐらい前のこと。聞くともしなについていたラジオから「見世物」という言葉が聞こえてきた。おや、と思って耳を傾けると、「見世物としての映画」とか「映画としての見世物」とか言っている。なんだろう。しばらく聞いていると話題にしているのは『カツベン!』という映画のことで、その映画を撮った監督を招いて、映画にまつわるさまざまな話をしているのだった。

「見世物としての映画、か。話を聞いているうちになんだか興味がわいてきた。この機会に映画と見世物について考えてみようか。そう思って、周防正行監督の映画『カツベン!』を観に行ってきた。



「カツベン」とは「活弁」、すなわち「活動弁士」のこと。といってもわかりにくい。映画の草創期、まだ音声がついておらず動く映像だけの時代、映画をシネマといい、日本語では無声映画、または活動写真と呼んだ。活動写真では上映のとき、音楽を演奏家が生演奏し、その内容を語り手が言葉で説明した。この演奏家を「楽士」、語り手を「弁士」といった。活動写真の弁士だから、「活動弁士」、略して「カツベン」である。

映画史をひもとくと、アメリカのエジソンが「キネトスコープ」を公開したが、明治 27 年 (1894)。日清戦争の年である。これは箱の中をのぞいて動く映像を見るものだった。その翌年、明治 28 年、フランスのリュミエール兄弟が

「シネマトグラフ」を公開する。これは映像をスクリーンに映写して見る方法で、これが現在の映画のはじまりとされる。日本ではその翌年、明治 29 年、シネマトグラフは早くも神戸で公開された。そのときすでに、撮影方法や映写の仕組みや写された映像の説明をする者がいたといい、それが活動弁士へと発展した。つまり本来は、技術の専門家もしくは技術に詳しい解説者であった。



明治 36 年 (1903)、活動写真の常設館として浅草に電気館が開場する。それが成功すると活動写真館は全国につぎつぎと開設され、ほどなく活動写真は大衆娯楽の王様となる。同時に活動弁士は花形職業となった。いつのまにか技術の解説者ではなく、お客を喜ばせる語り手＝芸者になっていたのである。1930 年代、音声付の映画、トーキーが生まれると、そちらに人気に移り、それからわずか数年後、ほとんどの映画がトーキーになると、活動弁士という職業自体がなくなる。現在でも博物館的な形で「活動弁士」は存在してはいるが、彼らが文字通り生き活きと活動していたのは、トーキーが主流となるまでの、わずか 30 年間ぐらいのことである。

◆活動写真の見世物性

さて、映画「カツベン!」は、フィクションではあるが、かなり緻密に時代考証をおこなったといい、時代は関東大震災から数年後 (大正 14 年=1925)、場所は奈良県のある都市に設定されている。映画としての評価は、映画評論家にまかせるとして、見世物としての映画という点にしばって考えてみたい。

まず、ラジオで周防監督とパーソナリティが「見世物としての映画」と述べていたのはどういう意味なのか。パンフレットに監督はこう書いている。

「映像に音がなかった時代、映画館は活動弁士の声、楽士の演奏する音楽、観客の歓声、かけ声、野次、そして涙と笑いに溢れていた。当時の映画館は、ライブパフォーマンス会場だったのである」

「ライブパフォーマンス」というのは、

活動写真は、監督が撮影し、それを編集して完成したのではなく、その映像をスクリーンに映写するときには、生の音楽演奏と弁士の語りが付いて、お客に提供されたということ。つまり、楽士と弁士がお客と一緒に映像を見ながら、毎回毎回、新たに演奏し新たに語って、作っていくものだった。極論すれば、同じ映像を映写していても、毎回、別の作品が出来上がっていた、ということであろう。



また、監督は山田洋次との対談で次のようにも語っている。

「当時はまだ、「映画とはこういうもの」という共有できる価値観がなく、みんなが手探り。(中略) 明治、大正、昭和の初め頃までは、(弁士にとっては) 目の前にいるお客さんがすべてだから、ウケないと思ったら、その映画のテーマも物語も関係なく、自由に変えたんじゃないでしょうか。映画は自分の語りの素材だと。」

つまり、映画とはどんな芸能か、作っている側もわからない手探りの時代だったから、目の前にいるお客さんがすべてであり、お客さんを楽しませるためには、弁士は映像のテーマや物語に関係なく、ウケないと思ったら、ウケるように中身を勝手に変えただろうと想像する。

これらをまとめると、周防監督の考える活動写真の見世物性とは、上映するたびに生の演奏と語り加わるライブパフォーマンスであり、その第一の命題は、映像のテーマや物語以上に、目の前にいるお客にウケるといったことだったということになるだろう。要するに、活動写真では、映像は、演奏および語りとともに、あくまでも素材の一つであるということである。

◆「カツベン!」の見世物的シーン

このような見世物観から映画「カツベン!」を見てみると、さまざまな見世物的なシーンがあった。思いつくままに書き上げてみる。

まず、プロローグ。牧野省三が撮影しているシーン。ひよんなことから、のちに主役となる二人の子どもが画面に映

りこんでしまう。にもかかわらず監督はカメラを回しつづけ、なんと完成した映画にもそのシーンが使われていて、さらに驚くのは、弁士はここに小さなエピソードを作って語りに組みこみお客の涙を誘っているのである。弁士も口から出まかせなら、撮影側も行き当たりばったりに近い。

それから十年後、主人公が映画館で働きはじめる。そこには人気弁士がいて女性にキヤーキヤー言われている。キザなタキシードを着込んで、美辞麗句を並べ立てるのがそのスタイルだ。おもしろいのは、映写技師はその語りに合わせてフィルムを送るスピードを調整している。撮影カメラが手回しであるのは知っていたが、映写機も手回しとは知らなかった。つまり当時は上映時間も毎回違ったということだ。

先輩弁士に、お前のはただの物真似だといわれた主人公は、一念発起、本来メロドラマをアチャラカ喜劇として語り、客席を笑いの渦に巻き込む。監督が述べている通り、映像は語りの素材で、弁士が自由自在に世界をつくってしまう場面だ。実際、大辻司郎という弁士は喜劇専門で、なんでもお笑い劇にしてしまったという話もある。ちなみに大辻は後に漫談家となって人気を博す。

この映画のなかでは更に過激な状況を作る。本来なんの関係もない映画の、関係のないシーンの、フィルムのコマ切れをつないで弁士のしゃべりだけで、一本の作品に仕立ててしまうという場面である。いくらなんでも現実ではありえない設定だが、こんな荒ワザも荒唐無稽ではないように思えてくる。むしろそれくらいムチャクチャの方が面白いんじゃないだろうか。

こうして並べていけばつぎつぎと見世物的場面を思い出すが、わたしが一番印象的だったのは、主人公が移動上映会で各地をまわっているシーンである。幟旗をはためかせてトラックが村にやってくる。荷台には、上映機材が山と積まれ、弁士や映写技師その他の働き手も乗っている。トラックを追いかける子どもたちがいて、トラックが止まると、子どもたちだけでなく、大人もどンドン集まってくる。村の集会所に機材が運び込まれ、窓や出入り口などに暗幕が張り巡らされ、簡易映画館にかわっていく。数時間後、場内には、大人も子供も、村中の人たちが集まって、ワァワァいながら映画を見ている。こうなるとライブというより祭りだ。弁士がどうの、映像がどうのとか、そんなレベルではない。映画

それ自体の祝祭性。考えてみれば、かつての「映画」という言葉には、「サーカス」という言葉にも共通するトキメキがあった。これこそ映画のもっている見世物性というべきであろう。

◆映画撮影の祝祭性

映画の冒頭シーン。子どもたちが、「はやく行かんとネタトリが終わってしまう」と言いながら駆けていく。ネタトリというのは映画界の専門用語で、撮影のことだという。子どもたちが目指す映画の撮影現場には、すでにいっぱい野次馬がいて人垣を作っている。彼らは、カメラと監督など撮影スタッフのうしろから、旧いお堂を背景に目をむいて見得を切ったり、カツラをとばさんばかりにひっくり返ったりする役者たちの芝居を眺めつつ、アーでもないコーでもないのがやがや言っている。映画撮影というイベントは村にとってはまさしくお祭り騒ぎなのだ。

こうしたお祭りの雰囲気のあるシーンはなかなかスタジオのセットでは作りにくい。多くの場面は、京都・太秦の東映撮影所で撮影したというのが、全国各地でもロケをおこなった。そのロケマップがパンフレットに載っていた。



冒頭のシーンは、栃木県真岡市の専修寺という親鸞聖人の旧跡での撮影である。そのほか、主人公の働く映画館の内部は、旧広瀬座。福島市にある明治 20 年ごろ建てられた芝居小屋で国指定重要文化財である。そのライバルの映画館は、ちょっと洋風のハイカラな建物で、こちらは滋賀県の豊郷小学校。昭和 12 年建築の登録有形文化財。十数年前、町長が取り壊しと決定したのを町民が住民投票で阻止したことで話題になった

名建築である。また、岐阜県下呂市の白雲座と鳳凰座の客席と舞台も利用されたようだ。白雲座は明治 23 年に舞台開きが行われた農村舞台。鳳凰座は江戸時代からある農村舞台を明治 16 年に客席を増築、その後大改築を行っていまも使われている芝居小屋だという。

こういう実際に昭和初期から使われてきた文化財での撮影というだけでも心が躍るのに、さらにこのロケには大勢の現地エキストラが観客として参加している。この人たちにとっては、本当に映画撮影はお祭りに違いなく、それがウキウキとした雰囲気になって画面に漂っている。この映画にはこうした見世物性が満ち満ちている。

◆絵解きの系譜

ところで、周防監督はラジオパーソナリティに、ご自分でも活動写真を撮ってみたいかと問われて、「撮ってみたい」とは答えなかった。当然だろう。自分が撮ったものを弁士が勝手に語りで変えてしまうような映画を作りたい監督はいないだろう。また、いまさらそんな時代に戻れるわけもない。

しかし、カツベン付きの映画上映会は 10~20 年前より確実に増えている。素材となる活動写真は、著作権は切れ、映像もデジタル化されて手に入りやすい。プロジェクターも高性能で安価になった。つまり、ちょっとしたスペースがあればどこでもできるし、実際、そのように行われている。

また、カツベンとは離れるが、トークイベント付きの映画上映会というのも多い。デジタル撮影が主流となった上に、上映も簡単なので、映画は純粋に娯楽を目的としたもの以外に、社会問題や歴史・科学などの学術研究をテーマにしたものもたくさん作られていて、それらは全国各地の集会で、シンポジウムや講演会の教材として上演されている。

映画はそれが生まれてから約 130 年。絵画や音楽、あるいは小説などと同様、確固たる芸術ジャンルに育った。しかし、視覚によるメディアと考えれば、絵解き文化の系譜につらなる。絵解きの絵は、絵画として完成されたものでありながら、それが識者によって語られることで別の命を吹き込まれる。映画という芸術も、語られることで別の芸術、別の文化となるのではなかろうか。いまやスマホで誰もが簡単に動画を撮って配信する時代である。思いもよらないような、ニューカツベンが、突然、生まれることもあるかもしれない。